

RBV 研究の経済学的源流と内包する理論的課題

石 川 伊 吹

- I. はじめに
- II. RBV の源流としてのデムデッツの産業組織論研究
- III. RBV の生成とシカゴ・UCLA アプローチ
- IV. シカゴ・UCLA アプローチの限界と今後の方向性
- V. おわりに

I. はじめに

周知のように「リソースベースド・ビュー（以下、RBV）」は、これまで何度もペンローズ（Penrose, 1959）の研究“*The Theory of Growth of The Firm*”（邦訳名『企業成長の理論』）をその理論的源流として関連づけてきた（Ex. Kor and Mahoney 2000）。しかしながら注意深く見ていくと、少なくとも経済学を志向した形（例えば、Lippmann and Rumelt 1982; Rumelt 1984; Barney 1986）において、RBV がその源流として「シカゴ学派」の産業組織論（Brozen 1971; Demsetz 1973,1974,1982; Peltzman 1977）に依拠していることにほとんど議論の余地はないように思われる。

このアプローチのひとつの中心的な狙いは、長期的に持続するパフォーマンスの違いを市場での独占力の濫用によってではなく、競争的な条件下で獲得した個別企業の効率性に基づき説明することである。これは、1960年代に支配的であった「ハーバード学派」の産業組織論（それはPorterの初期の研究[1980]での知的源泉である）への反論として1970年代を通じて発展してきたものである。初期のRBVの研究者たち、なかでもルメルト（Rumelt）やバーニー（Barney）にとって、シカゴ学派のアプローチは、今日の戦略マネジメント論の領域を特徴づける企業独自あるいは企業特定の要因の重要性と経済的均衡理論とを調和させる魅力的な方法を提供していた。

シカゴ学派の伝統は、今日「RBV」研究において頻繁に引用され、RBVの基本形を提供するバーニー（Barney 1986, 1991）やペタラフ（Peteraf 1993）らの研究におい

て直接的に確認することができる。ペタラフ（Peteraf 1993）では、近代経済学のテキストで見られる最も基本的な需要と供給曲線を利用しながら、競争均衡において「レント」が生じる条件に目が向けられている。また、「ある企業は、既存の競合他社や潜在的な競合他社が実行できない価値を創造する戦略を遂行したり、あるいはそうした戦略におけるベネフィットを他社が複製することができないときに、持続的な競争優位を確保している（Barney 1991, p.105）。」とバーニーが強調するとき、持続的な競争優位は、高いパフォーマンスを実現する企業を模倣したり、代替しようとするすべての試みが停止した状況、すなわち均衡を確保した状況において定義されている。

均衡状況が確保されるペタラフの条件分析は、複製にコストがかかる効率的な資源や均衡的図式を重視するシカゴ学派の流れ（例えば、Brozen 1971; Demsetz 1973,1974,1982を参照）の中にあり、バーニー（Barney 1991）についても、すべてのパフォーマンスの違いは戦略に介在する資源の効率性の違いに規定され、優れた収益性は社会的厚生と完全に調和する、というシカゴ学派のテキストから直接的にもたらされている。もちろん、競争優位のひとつの条件として、バーニーが彼の初期の研究（Barney 1986）で重視した「不完全な要素市場」もまたシカゴ学派の伝統からもたらされていることは言うまでもない。いずれにせよ、RBVがシカゴ学派の思想的伝統から深い影響を受けていることは明らかである。しかしながら、こうした学派的な視点からRBVの理論的基礎や源流を解明する取り組みは、これまでほとんど見られない。既存のRBVはペンローズの

研究と繰り返し、関連づけられているのである。

本稿の目的は、改めて「RBV」研究の誕生の経済学的源流について明らかにしたい。また、それとともに、RBVのその固有の知的背景ゆえにもたらされる理論的課題を整理する。したがって、本稿は次のように構成される。次のパートIIでは、RBVの嚆矢であるハロルド・デムゼットの研究に触れる。ここでは、シカゴ学派の産業組織論がRBVの出発的であったことが明確になるだろう。パートIIIでは、デムゼットの研究を受けて、RBVの初期の研究の特徴を整理し、続くパートIVで経済学ベースのRBVの理論的課題を明らかにする。

II. RBVの源流としてのデムゼットの 産業組織論研究

RBVが誕生以前、戦略マネジメント論ではポーター (Porter 1980) の研究が支配的であった。彼の研究は、ハーバード学派の伝統的な「SCPパラダイム」に基づきながらも、その競争上のインプリケーションを逆転させ (Porter 1981)、企業の収益性の源泉として「不完全競争 (例えば、参入や移動障壁が意味を持つ)」の製品市場に焦点を当てたものである (Porter 1980)。「ファイブ・フォース」で有名な彼が開発した枠組みは、実務ならびに学術的にも多くの支持を集めていた。しかし、他方でポーターが依拠した「S-C-Pパラダイム」それ自体は、エンピリカルな検証に対して多くの困難に直面していた。彼が重視した産業構造と企業の収益性との間の関係は極めて不確実なものであることが判明していったからである (Demsetz 1973; Rumelt 1991, 1987; Jacobson 1992; Cool and Schendel 1988)¹⁾。

また、こうしたエンピリカルな検証と並行し、「S-C-Pパラダイム」から導き出される競争上のインプリケーションとは逆行する、すなわち、産業内での高い集中度や、特定企業の規模の拡大などを擁護する議論も活発になされていた。とりわけ、シカゴ学派の経済学者たちは、観察される巨大企業の存在や平均以上の利潤を確保する企業には、そのライバルと比較して生産や流通において高い効率性が実現されていると解釈してきた。実は、そうした中で、デムゼット (Demsetz 1973) がRBV研究の誕生に大きな影響を与えることになる (例えば Lipmann and Rumelt 1982 を参照)。

1. シカゴ学派の産業組織論とデムゼットの研究成果

経済学者としてのキャリアの中でシカゴ学派の教育を受け、カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (以下、UCLA) で教鞭を執るハロルド・デムゼット (Harold Demsetz 1973)²⁾ は、彼の画期的な研究論文「*Industry Structure, Market Rivalry and Public Policy*」において、産業内における高い集中度は、企業の過去からの効率性の結果であり、それが高い「レント」に反映されることを主張した。これは必ずしも独占だけが企業に高い利潤をもたらしているわけではないということである。

高い産業集中を引き起こすコスト優位性は、規模の経済あるいは、プラスに傾斜する限界費用曲線における下方へのシフトに反映されたものかもしれないし、低いコストで需要を満たすより優れた製品に反映されたものかもしれない。もちろん、新たな効率性は、他の方法でも生じるだろう…。そうした利潤は、競争によって即時的に取り除かれる必要はない。優れた競争上のパフォーマンスは、企業に特定のであり……その企業は、他の企業には分離できない評判やのれんといったものを構築しているかもしれない…。あるいは、従業員のチームのメンバーが達成する高い効率性は、彼らが働く特定の企業環境において、お互いについて彼らが所有する知識からもたらされたかもしれない…… (Demsetz 1973, pp.1-2)

これは、ハーバード学派の「S-C-Pパラダイム」の競争上のインプリケーションとは異なり、企業の潜在的な競争優位が企業特殊な効率性に起因するかもしれないことを示している。シカゴ学派の経済学では、あくまでも産業構造が企業のパフォーマンスを規定するのではなく、果敢な努力を通じて達成した企業の効率性によって決まると考えるのである。もちろん、当然にこの学派では、集中度の高い産業への捉え方も変わってくる。

[もちろん]他の企業ができないにもかかわらず、ある企業が一定期間において大成功を納めてしまうことが偶然にも起こるかもしれない。その成功企業がパフォーマンスの違いの理由を理解することや、成功企業のパフォーマンスが帰属するインプットが何であるかを知ることは難しいかもしれない。ちょうどそれは、なぜ、GMやI.B.M.がそれぞれの競合他

社よりも優れたパフォーマンスを達成するのかが突き止めることが容易ではないことと同じである。それら組織の複雑さが、容易な分析を許さない。成功を反映するインプットは、一定の期間において市場で過少評価されるかもしれない（Demsetz 1973, p.2）。

したがって、高い利潤を独占利潤と見なし、それが企業の規模や産業の高い集中度に起因すると解釈するハーバード学派の見解は、企業が効率性を追求するうえに欠かすことのできないインセンティブを阻害する恐れがある、というのがデムゼッツの主張である（p.3）。

成功している企業は、ある自然独占企業に関連するというよりは、むしろ古典派が展開した経済的レント（superior land of classical economic rent）の分析により密接に関連しているように見える（p.4）。

確かに「レント（rent）」を発生させるメカニズムが果敢な努力の結果であるならば、経済的な発展におけるその試みは積極的に評価されなければならない。もっとも、デムゼッツの主張は、そもそも 1960 年代に支配的であった企業活動への公共政策に多大な影響を与える独占禁止法のあり方と、それに対する誤った解釈に向けられたものであることに注意する必要がある。しかし、ここでの洞察を戦略マネジメント論研究に摂取したデムゼッツの UCLA での同僚らが、実は新しい戦略研究の流れを作っていくことになったのである（Barney and Arian 2001）。

Ⅲ. RBV の生成とシカゴ・UCLA アプローチ

デムゼッツの研究において重要なインプリケーションは、ある産業内の企業間の収益性の差異が、企業行動における効率性の「差異」に起因するという点である。確かに、この点において「S-C-P パラダイム」やそれに基づくポーターのアプローチでは、(1) ある産業内の企業が支配する資源や追求する戦略において企業は同質であり、(2) この産業で発展する資源は同種のものである、という諸前提（Barney 1991 p.100）を持つために、同一産業内の企業の収益性の差異を説明できないという限界

が見られる（Rumelt 1984 p.560; Nelson 1991 p.64）。もっとも、このアプローチは、戦略に必要な資源を識別したり、開発したりすることにも関心がない（Teece, Pisano and Shuen 1997, p.514）。

そこで、デムゼッツによって明らかにされた産業組織論研究のインプリケーションを戦略マネジメント論の分野に引きつけながら、ある種、ポーターの戦略研究における到達点を補完（Mahoney and Pandian 1992; Peteraf and Barney 2003）する研究成果が生み出されていくことになる。つまり、戦略マネジメント論研究は、「なぜ、いくつかの企業は他の企業よりも高いパフォーマンスを実現するのか」を説明するために各企業間の内部資源の特殊性に着目していくことになるのである（Rumelt 1984, 1987; Nelson 1991）。実は、それが「リソース・ベースド・ビュー（Resource-based view）」という分析視角である（Rumelt 1984; Barney 1986）。このアプローチは、産業構造を個別企業レベルでの「効率的な生産活動の結果」として捉えるシカゴ学派の経済学に大きな影響を受けた UCLA の研究者達（Demsetz 1973; Lippman and Rumelt 1982）を出発点に誕生した（Conner 1991; Rumelt, Schendel, and Teece 1991）。

1. 初期の RBV 研究

デムゼッツの研究成果を戦略マネジメント論の中に発展的に摂取し、新しい研究領域の扉を開いたのもまた UCLA でデムゼッツと共に教鞭を執り、彼の影響を強く受けた研究者達である（Lipmann and Rumelt 1982; Rumelt 1984; Barney 1986）。もちろん、彼らの仲でも、各企業間の内部資源の違いに着目することを通じて企業戦略の分析フレームワークを展開した最初の研究者は、リップマンとルメルト（Lipmann and Rumelt 1982）とルメルト（Rumelt 1984）であろう。ポーターが、経済学の産業組織論と戦略マネジメント論との間のひとつの架け橋となったように、彼もまた経済学に理論的支柱を求め戦略マネジメント論を進展させていった。

とりわけ、デムゼッツの直接的な影響を受けたルメルト（1984）は、新古典派経済学の企業の理論に依拠しながらも、そこに介在する諸前提を発展的に緩めることによって、なぜ、ある企業は競争優位を獲得し、他の企業はそれができないのか、という経験的な現象の理論分析に取り組んだ。

新古典派経済学の企業の理論では、認識可能な生産関

数によって企業の行動は決定され、「完全情報」による模倣的行為がすべての企業の効率性を均衡させる。ルメルトは、このモデルに依拠しながらも、各企業の生産関数の形成が「不確実性」から影響を受け、またそれによって参入や拡大計画が企業ごとに大幅に異なることになり、産業内には様々な効率性を持った企業が存在することを定式化した。このモデルの中でも、新規参入が継続する限り、価格は低下し、非効率なコスト関数を持った企業は撤退することになるという価格理論の前提が置かれる。ここでは、ある潜在的な参入者が参入を見送る均衡点においても、その産業には均衡価格で存続可能なぎりぎりのコスト効率を持った企業から、コスト効率が高い企業まで、様々な効率の企業が存続することになる。

ルメルトのモデルでは、均衡価格で高いコスト効率を実現している企業に対して、平均以上の余剰利益、すなわち、「レント」が発生することが操作化される。デムゼッツの指摘した「レント」概念は、ルメルトを経て、企業の理論の中に導入されたのである。

ルメルトによれば、この「レント」を生み出す高いコスト効率性は、生産関数の「不確実な模倣可能性 (uncertain imitability)」によってもたらされると主張した (pp.562-566)。「不確実性」はそれぞれの企業の生産関数に異質性をもたらし、他の企業の模倣を通じた同質化を困難にさせるからである。そして、もしそうであれば、ある企業が獲得する競争優位は、既存企業からの模倣を困難にする「特殊な」資源や能力を持っていることに起因すると特定できる。彼は、このように「不確実な模倣可能性」によって、特定のある企業に「レント」をもたらすメカニズムを「隔離メカニズム (isolating mechanism)」と呼んだ (p.566)。彼によれば、「隔離するメカニズム」には、企業が持つ資源や「特殊な資産」、例えば「特許」、「評判」、「トレード・マーク」、「ブランド・イメージ」、そして「チームに具現化されたスキル」などが対応し、それらが企業の競争優位をもたらす (Rumelt 1984, p.567)。

かくして、ある企業が、なぜ、競争優位を確保することができるのか、という経験的な問題は、ある特定の企業が他の企業からの模倣や競争を制限するような企業特殊な資源を持ち、それらが「レント」を生み出すという意味において理解されるのである。ルメルトは、これまでの戦略マネジメント論では説明できなかった企業間の収益性の差異がどこから生じるのか、という戦略マネジ

メント論上の空白を、デムゼッツの研究を基礎に埋めることに成功し、「競争優位」の源泉が企業の内部にあることを明確化したのである。また注目すべきは、ここにご戦略マネジメント論研究における RBV の誕生を見るのである。

2. シカゴ・UCLA アプローチとしての RBV

RBV は、デムゼッツの研究を源流に出発した。最初にその役割を担ったのがデムゼッツの UCLA での同僚であるルメルトであったが、その後 RBV を発展させたのも、当時 UCLA に所属していた研究者である (Barney 1986, 1991)。それは、現在 RBV 研究の世界的権威であるジェイ・バーニー (Jay Barney) である。彼の初期の RBV 研究 (Barney 1986, 1991) は、今日 RBV 研究の基本型として、もっと頻繁に引用されているが、実はそのバーニーがアリカンの共同研究において、自らのアプローチに対するシカゴ学派からの影響を認め、デムゼッツが RBV の台頭を予測していたと指摘している (Barney and Arian 2001, P.130)。

今日、戦略マネジメント論研究で散見する代表的な RBV 研究は、産業組織論のシカゴ学派のアプローチに多くの成果を負っていることは明白である (e.g. Barney 1984, 1991, 2001 ; Peteraf 1993; Peteraf and Barney 2003)。もっとも、それを厳格に位置づけるのであれば、RBV への代表的なアプローチを「シカゴ・UCLA アプローチ」と呼ぶことができるだろう。

さて、初期の RBV 研究は、デムゼッツの研究成果やシカゴ学派の思想にその源流をもつのではなく (e.g. Mahoney and Pandian 1992; Amit and Schoemaker 1993; Mahoney 1995; Kor and Mahoney 2000)、ベンローズ (1959) をそのルーツとし、ワーナーフェルト (Wernerfelt 1986) の研究を RBV 研究の嚆矢とする学説評価が数多くみられる。むしろそれが一般的な評価として定着しているが、この点については改めて吟味する必要がある。

3. ワーナーフェルト研究の位置づけ

企業特定の内部要因に着目する研究は、ポーターが依拠した「S-C-P パラダイム」やそこに内包する政策的インプリケーションに対する批判のみを発端に生まれてきたわけではない。むしろ、その研究の萌芽にはポーターの理論フレームを強化する流れがあったことにも注目すべきである (Wernerfelt 1984)。すなわち、ポーターの

「ファイブ・フォース」モデルを活用しながらも、主に企業の内部資源やケイパビリティに着目し、それら資源やケイパビリティに基づいて戦略的なオプションを眺めるという理論フレームが提案されていたことである（Wernerfelt 1984）。それは、ワーナーフェルト（Wernerfelt 1984）の取り組みであり、実は「リソース・ベースド・ビュー」という表現を最初に戦略マネジメント論研究に持ち込んだのは彼なのである。この意味で、彼は RBV の嚆矢のひとりであると頻繁に理解されている。しかしながら、この点についてはワーナーフェルト自身が認めるように大いに議論の余地がある。

[私の]論文が1984年に公刊されたときには、それは無視されていた。1984年から1987年までの間、その論文は合計で3つほどの引用しかされなかった。1988年から1989年まで、その論文は学術的にほとんど影響力を持たなかったのである（Wernerfelt 1995, p.171）。

このことは、ワーナーフェルトを RBV の嚆矢と位置づけるには、まだ尚も多くの議論が必要になることを意味する。もちろん、ワーナーフェルトが1984年時点において「リソース・ベースド・ビュー」という表現を戦略マネジメント論研究に持ち込み、資源間の競争が競争優位の獲得において決定的に重要であるという認識を示したことは評価できる。しかしながら、彼自身の研究が当時どの程度、RBV の誕生や発展に貢献していたかについては必ずしも明確ではない。もっとも、彼の研究が RBV 研究の胎動たりえなかったことは明らかであろう。

IV. シカゴ・UCLA アプローチの限界と 今後の方向性

ここまで見てきたように、このシカゴ学派のアプローチを借用することで、RBV という戦略マネジメント論研究における新しい枠組みが開発されてきた。しかしながら、このアプローチに依拠することによって概念化される経験的な現象は、実のところ制限されてしまうという問題が存在する。それは、シカゴ学派に固有の方法、すなわち社会的な現象を本質的に競争均衡から捉える方法に起因している。このアプローチの中核は、「十分な

証拠を伴わなくても、観察される価格と量を長期的な競争均衡価値への好ましい近似として捉えることである（Reder 1982, p.12）」。この競争均衡の概念上の帰結は、教科書で展開されているような「完全競争」ではない。例えば、優れた技術を模倣するにはコストがかかるかもしれないし、あるいは、要素市場において情報の非対称性があるかもしれないことは前提にされている。しかしながら、RBV モデルが「競争均衡モデル」において構築されていることによって、意図せざる理論上の帰結が生まれてしまう。固有の課題をそれぞれ見ていきたい。

1. 不均衡の欠如

シカゴ学派の基本的な方法論に基づくことによって、RBV の戦略的な世界観は均衡の観点から表現されている。それゆえに、不均衡の状況でもっともよく理解される戦略マネジメントの諸側面が欠如してしまう。まず、「常に」均衡している RBV のアプローチでは、アントレプレナーシップの余地を残すことは難しい。なぜなら、アントレプレナーシップの本質は均衡を取り戻すか、あるいは破壊することかのどちらかにあるからである（Schumpeter 1912; Kirzner 1973）。もちろん、アントレプレナーシップの影響を吟味するために均衡モデルを活用することは可能（例えば均衡でレントを獲得している期間において）ではあるが、そのモデルからアントレプレナーシップの現象それ自体が理解できるわけではない。このことと関連して、動的なプロセスの理解は良くても比較静学にとどまる。すなわち、介在するデータが異なるゆえに変数が変わる均衡を比較するだけである。不均衡の特徴はある均衡から他の均衡への変化である一方で、そのモデルでは、そうした変化を扱うことはない。ひとつのインプリケーションは、目新しい方法で資源をコンビネーションするという不均衡のプロセス（例えば、新しい競争優位を構築するといったプロセス）は問われることがない、ということである。

2. 所与の資源属性

既存の RBV の研究者は、高いパフォーマンスを実現するために必要な資源の属性、すなわち、競争優位をもたらす効率的な資源の条件について追究してきた（Ex. Barney 1991; Peteraf 1993）。しかしながら、そもそもいかにして企業の資源が戦略的に効率的なものになったのか、さらには、提案された条件を満たす資源の属性は一

体どこからもたらされるのかという決定的な問題についてはこれまで明らかにしてこなかった。おそらく、これは間違いなことだが、高いパフォーマンスを与える資源の属性は、決して「客観的」に与えられているようなものではない。つまり、実践において考察すれば明らかのように、資源の属性はRBVの研究者が提案するような方法で与えられているようなものではないのである。

このことは、RBV研究が知識ならびに個々人のプラン(Hayek 1945; Lachmann 1977, 1986; Kirzner 1997; Salerno 1999)における「主観性」を軽視していることを意味する。ボーン(Vaughn 1994)が主張するように、将来的な価値創造ならびに競争優位確保へ向けて資源がなしうる貢献は、「情報」にあるのではなく、企業家がすでに持つ知識や企業家が評価のプロセスに適用するメンタル・モデルに基づいた評価からもたらされる(Menger 1871; Mises 1949; Salerno 1999)。決定的なのは、「特徴」、「機能」、「可能な利用方法」などの資源の属性は客観的に与えられていることはなく、企業家的な評価によってまずもって構成され、企業家のプランが実行される時にそうした属性が具現化される。かつて、ラッハマン(Lachmann 1956)が観察したように、物質的な性質によって例えば、高炉やビールの樽が単に資本財と見なされるのではなく、企業家的なプランに沿ってそれら財が「果たす役割において」資本財として見なされるのである。しかしながら、この主観主義の基本的な洞察がRBVにおいては十分に展開されていないのである。

3. 競争概念の矮小化

ハイエク(Hayek)が競争均衡モデルで意味する「競争」が極めて狭い意味で扱われていることを最初に指摘し、批判したことは極めて有名である。ハイエクは指摘する：

広告、値引き、生産される財やサービスの改善(品質差別化)はすべて、定義によって排除される—「完全」競争は、実際あらゆる競争的活動の不在を意味する(Hayek 1948, p.96)。

RBVでは、競争的な行為は均衡において模倣からレントの流出を防ぐかもしれない障壁をつうじて主に表現され、それは「模倣競争」として表現される価値の確保である。したがって、RBVで考慮されている競争的行為は極めて制限された意味しかもたない。製品差別化、

価格の差別化あるいは製品イノベーションに関する競争は考慮されていない。概念化される、ならびに説明される現実的な世界の諸現象は、分析家が適用する理論やモデルにおいてかなりの範囲で構成される。戦略マネジメントの中心的な多くの現象は、「継ぎ接ぎ的」な競争均衡モデルでは捉えることができない。

4. RBV研究の今後の方向性

RBV研究は、企業間の異なった資源の束がそれぞれの効率性の違いを生みだし、それが直接的に高いパフォーマンスの源泉であることを強調してきた。また、このRBVの理論フレームは「均衡」概念を基礎に、高いパフォーマンスが生じる条件分析に力点を置いている。そのため資源の属性を「所与のもの」として位置づけ、それがいかにもたらされるかという「動的」な側面を完全に見落としてきた。この限界は、RBV研究者の思想的傾向、すなわち、ある資源が客観的に与えられ、かつそれがベストな方法で利用されていると前提づけるシカゴ学派の均衡志向の伝統を継承しながら企業の戦略的行動に介入する諸現象を理解しようとしたことに起因する。

このように、もしも既存の理論フレームそれ自体が持つ限界が、それが依拠するメタな理論フレームにあるならば、メタのフレームそれ自体の変更を通じて、発展を模索することが有効になる。これまで近代経済学では、シカゴ学派のアプローチに対して様々な批判が展開されてきた。代表的なものに、オーストリア学派経済学がある。この学派は、とりわけ企業家論研究を通じて、近代経済における動的な現象の解明に力を注いできた(Hayek, 1945, 1948; Lachmann 1956; Kirzner 1973)。今後、RBVにはこうしたメタレベルでの視点の変更や知見の撰取が不可欠になるだろう。

V. おわりに

企業内部の「資源」に着目する戦略マネジメント論研究、すなわち、「RBV」は、デムゼッツの研究をルーツに誕生した。そのためRBVは、シカゴ学派の中核である競争均衡モデルに基づき、持続的な競争優位を生み出す企業特定の資源にはどのような条件が不可欠か考察することに焦点を当ててきた。それは、ある企業が競争優

位を獲得した時点を描き出す競争「均衡」の理論フレームであるが、そのことが、資源の属性を「所与のもの」として位置づけ、それがいかにもたらされるかという「動的」な側面を完全に見落とさせてしまうという限界を生み出してしまった。この限界は、暗黙のうちにシカゴ学派の伝統である「均衡志向」がもたらしたことは明白である。

今後、RBVは「動的」側面を深めていく必要がある。それはシカゴ学派が重視する「均衡」概念からの脱却を意味し、同時に動学的な側面を重視する企業家論研究の適用の必要性を示唆している。

注

- 1) 例えば、ルメルト (1987) は、アメリカ企業 1,292 社の 20 年間の資本利益率に分散分析を適用した結果、産業内での企業の長期的な利益率のパラッキが、産業内の平均利益率の産業ごとのパラッキよりもはるかに大きいという結果を確認したという。つまりこれは、この余剰利益率の差が、当該産業の構成員であることから生じるというよりも、むしろ企業に固有の要因から生じていることを意味している (pp.140-142)。
- 2) ハロルド・デムゼツ (Harold Demsetz) は、1930 年にイリノイ州で生まれる。1953 年にイリノイ大学において、経営管理の学士を取得し、1954 年には、ノースウェスタン大学において経営学修士号 (MBA) を、1959 年には、博士号 (Ph. D) を取得している。1958 年からミシガン大学にて教鞭を執り、続けて 1963 年までカルフォルニア大学ロサンゼルス校に赴任、さらに 1963 年から 1971 年までシカゴ大学において教鞭を執り、再びカルフォルニア大学ロサンゼルス校に戻っている。彼の代表的な業績には、シカゴ学派の影響を受けたものが数多く見られる。

参考文献・論文

- ・ Amit, R., and P. J. H. Schoemaker. 1993. "Strategic Assets and Organizational Rent." *Strategic Management Journal* 14: 33-46
- ・ Barney, Jay B. 1986. "Strategic Factor Markets", *Management Science* 32: 1231-1241.
- ・ Barney, Jay B. 1991. "Firm Resources and Sustained Competitive Advantage", *Journal of Management* 17: 99-120.
- ・ Barney, Jay B. 2001 "Is the Resource-Based 'View' a Useful Perspective for Strategic Management Research? Yes," *Academy of Management Review* 26: 41-56.
- ・ Barney, B.J. and Arikan, A.M. 2001, "The Resource-based View: Origins and Implications" In Hitt, Freeman., and Harrison. (ed.) (2001), *The Blackwell HandBook of Strategic*

Management., Blackwell Publishers,Ltd.,2001

- ・ Brozen, Yale. 1971 "The Persistence of 'High Rates of Return' in High-Stable Concentration Industries," *Journal of Law and Economics* 14: 501-512.
- ・ Conner, K.R. 1991, "A Historical Comparison of Resource-Based Theory and Five School of Thought Within Industrial Organization Economics: Do We Have a New Theory of the Firm?," *Journal of Management.*, Vol.17., No.1., 1991., pp.121-154.
- ・ Demsetz, Harold. 1973. "Industrial Structure, Market Rivalry, and Public Policy", *Journal of Law and Economics* 16: 1-10.
- ・ Demsetz, Harold. 1974. "Two Systems of Belief About Monopoly", in idem. 1989. *Efficiency, Competition, and Policy*. Oxford: Basil Blackwell.
- ・ Demsetz, Harold. 1982. "Barriers to Entry", in idem. 1989. *Efficiency, Competition, and Policy*. Oxford: Basil Blackwell.
- ・ Hayek, Friedrich A. von. 1945. "The Use of the Knowledge in Society." *The American Economic Review*.55: 519-530.
- ・ Hayek, Friedrich A. von.1948. *Individualism and Economic Order*. Chicago: University of Chicago Press.
- ・ Jacobson, R. 1992. " The Austrian School of Strategy. " *Academy of Management Review* 17: 782-807.
- Kirzner, Israel M. 1966. *An Essay on Capital*. New York: Augustus M. Kelley.
- ・ Kirzner, Israel M. 1973. *Competition and Entrepreneurship*. Chicago: University of Chicago Press.
- ・ Kirzner, Israel M. 1997. "Entrepreneurial Discovery and the Competitive Market Process: An Austrian approach". *Journal of Economic Literature*. 35: 60-85.
- Knight, Frank H. 1921. *Risk, Uncertainty, and Profit*. New York: August M. Kelley.
- ・ Kor, Yasemin Y. and Mahoney, Joseph T. 2000. "Penrose's Resource-Based Approach: The Process and Product of Research Creativity." *Journal of Management Studies* 37 (1) : 109-39.
- ・ Lachmann, Ludwig M. 1956. *Capital and Its Structure*. 1977 re-issue. Kansas City: Sheed Andrews and McNeel.
- ・ Lachmann, Ludwig M. 1977. *Capital Expectations and the Market Process: Essays in the Theory of the Market Economy*. W. E. Grinder ed. Kansas City: Sheed Andrews and McMeel.
- ・ Lachmann, Ludwig M. 1986. *The Market as an Economic Process*. Oxford: Basil Blackwell.
- ・ Lippman, Steven A. and Rumelt, Richard P. 1982. "Uncertain imitability: an analysis of inter firm deficiency under competition". *The Bell Journal of Economics* 13: 418-438.
- ・ Mahoney, J. T. 1995. "The Management of Resources and the Resource of Management." *Journal of Business Research* 33:

- 91-101.
- Mahoney, J. T. and Pandian, J. R. 1992. "The Resource-based View within the Conversation of Strategic Management." *Strategic Management Journal* **13**: 363-380
 - Menger, Carl. 1871. *Principles of Economics*. New York: New York University Press, 1985.
 - Mises, Ludwig von. 1949. *Human Action*. New Haven: Yale University Press.
 - Nelson, R.R. (1991), "Why Do Firms Differ, and How Does it Matter?" *Strategic Management Journal*, Vol.1., pp.261-74.
 - Peltzman, Sam. 1977. "The Gains and Losses from Industrial Concentration". *Journal of Law and Economics* **20**: 229-263.
 - Penrose, Edith T. 1959. *The Theory of the Growth of the Firm*. Oxford: Oxford University Press.
 - Peteraf, Margaret A. 1993. "The Cornerstones of Competitive Advantage: A Resource-Based View". *Strategic Management Journal* **14**: 179-191.
 - Peteraf, M. A. and Barney, J. B. 2003. "Unraveling the Resource-Based Tangle." *Managerial and Decision Economics* **24**: 309-323.
 - Porter, Michael E. 1980. *Competitive Strategy*. New York: The Free Press.
 - Porter, Michael E . 1981."The Contributions of Industrial Organization to Strategic Management." *Academy of Management Review* **6**: 609-620
 - Reder, Melvin W. 1982. "Chicago Economics: Permanence and change". *Journal of Economic Literature*. Vol. XX.
 - Rumelt, Richard P. 1984. "Towards a Strategic Theory of the Firm," in Richard B. Lamb, ed. *Competitive Strategic Management*. New Jersey: Englewood Cliffs.
 - Rumelt, Richard P.1987. "Theory, Strategy, and Entrepreneurship", In D. Teece ed. *The Competitive Challenge: Strategies for Industrial Innovation and Renewal*. Cambridge, MA: Ballinger
 - Rumelt, R.P. 1991, "How Much Does Industry Matter?", *Strategic Management Journal*, Vol.12.,1991.,pp.167-185.
 - Rumelt, R.P, Schendel, D and Teece, D.J.1991, "Strategic Management And Economics.", *Strategic Management Journal*, Vol.12.,pp.5-29.
 - Salerno, Joseph. 1999. "The Place of Mises's *Human Action* in the Development of Modern Economic Thought". *Quarterly Journal of Austrian Economics* **2**: 35-65.
 - Schumpeter, Joseph A. 1912. *The Theory of Economic Development: An Inquiry into Profits, Capital, Credit, Interest, and the Business Cycle*. Translated by Redvers Opie. Cambridge, Mass.:Harvard University Press, 1934.
 - Teece, D.J, Pisano, G, and Shuen, A. (1997). "Dynamic Capabilities and Strategic Management." *Strategic Management Journal*, Vol.18:7., pp.509-533.
 - Vaughn, Karen I. 1994. *Austrian Economics in America: The Migration of a Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.
 - Wernerfelt, Birger. 1984. "A Resource-based View of the Firm". *Strategic Management Journal* **5**: 171-180.
 - Wernerfelt, Birger. 1995. "A Resource-based View of the Firm: Ten Years After." *Strategic Management Journal* **16**: 171-174